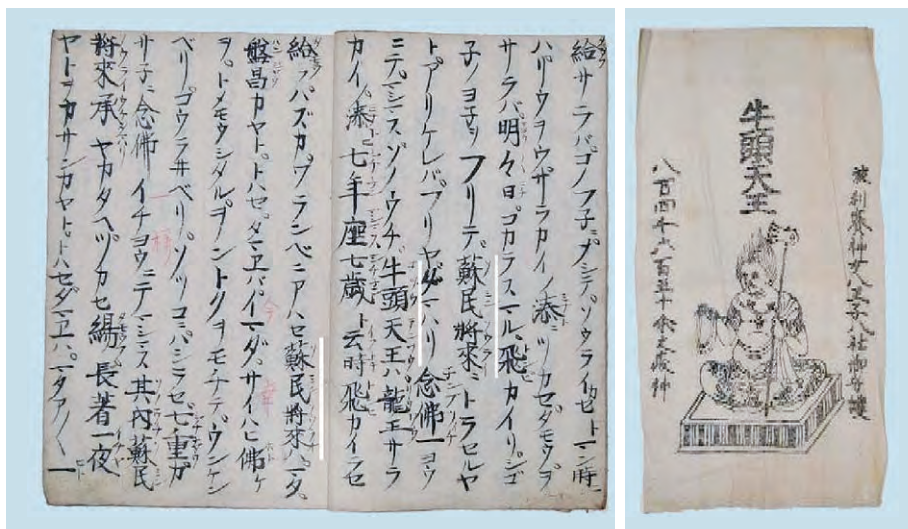


■いわて文化ノート

ご ず てんのう そ みるしやうらい
牛頭天王と蘇民将来のおはなし

学芸員 川向富貴子



写真① 久慈修験文書(館蔵)

▼向かって右「牛頭天王御札」(摺物、一紙物、年代不詳)
 一般に、「波利婁神女」は牛頭天王の后、「八王子」は子供、「八万四千六百五十余之疫神」は眷属達をあらわす。本資料は疫病よけの御札であろう。
 ▼向かって左「厄神経」(墨書、冊子、表紙に天保3年(1832)銘)
 奥付に「奥州南部八戸段開伊那久慈小久慈邑 水上山園學坊」。円学坊の詳細は不明。内容は次のとおりである。
 【梗概】龍王のもとへ参入するために旅立った牛頭天王は、途中コタンという者の家に立ち寄り一夜の宿りを請うが断られた。次に蘇民将来という者の家を訪ねるとして持てなしてくれた。その後、龍王のもとで7年を過ごした牛頭天王は、帰途蘇民将来のもとを訪ねると再び歓迎してくれた。そこで、コタンの消息を訪ねると、今でも繁盛しているという。牛頭天王はコタンを滅ぼそうとするが、コタンの家に嫁いでいる娘は助けて欲しいと蘇民将来に請われた。そこで、南方のゴマギ(※スルデのことか)の一枝の面を八角にし「ソミンソウライシソンモン(※蘇民将来子孫門)」と書いたものを、男子は左の袖、女子は右の袖につけよと教示した。コタンは家屋敷を堅固にかためるが、ついにユムギ(蓬)の矢と桃の木の弓で射落とされた。

1 蘇民将来と牛頭天王

写真①は、昨年度、久慈市の方からご寄贈いただき、ただいま公開活用に向け整理中の資料群の一部です。久慈地方を拠点とする宗教者が用いていた文書類と考えられます。向かって左側の冊子『厄神経』は疫病よけの祈祷に用いた経文でしょうか。蘇民将来と防疫神・牛頭天王の交流をモチーフにした説話がまとめられています(上記梗概)。

このように、蘇民将来が来訪神から災



写真② 奥州市水沢区 黒石寺蘇民祭にて (1999.10.1.7-8撮影)

向かって左は蘇民祭で本堂に搬入される蘇民袋。同右は蘇民袋に納めるコマ木。コマ木はスルメ(1年目の若枝)の枝を五角形に削り、一角ごとに「蘇民/将来/子孫/門戸/也/☆(※中に点)」と墨書している。

厄(主として疫病)を免れる方法を授かる筋の説話は、県内で年頭に行われる蘇民祭の由来としても知られています。話の中にみえる「ソミンソウライシソンモン」と書きつけた八角の木片は、蘇民祭で争奪の対象となる袋の中に納められた木製の護符を想起させる記述です(写真②)。

また、初夏に行われる夏越祓(写真③、茅輪くぐりなど)や、神社で頒布される茅輪守りを通じて、この説話をご存知の方も多いのではないかと思います。



写真③ 花巻市湯本 羽山神社にて (2008.7.7撮影)

羽山に登頂する前に、神官の後に神楽囃子、一般参詣者が並び茅の輪をくぐる。

しかし、私たちが今日聞くことのできる蘇民将来の説話に、来訪神として「牛頭天王」という名が登場することはめったにありません。その代わりに、記紀神話の「スサノオノミコト」や牛頭天王の本じぶつ地仏「薬師如来」が担っているからです。

こうした要因のひとつに、明治初頭の神道国教化政策に関わる一連の改革が影響したと考えられます。いわゆる「神仏分離令」により、牛頭天王を祭祀する社堂は「八坂」「津島」「八雲」などへの社名変更を余儀なくされ、その多くは祭祀対象をスサノオノミコトに改めました。これにより、牛頭天王信仰は公的に排斥され、一時的に実体と信心の自由を失った経緯を有しているからです。しかし、長い時間をかけ日常生活にとけこんできた天王信仰は、その後も脈々と息づき今日に伝えられてきました。そこで、本頁では岩手県においてどのような形で天王信仰が残り展開しているのかを概観していくこととします。

2 県内の天王祭の諸相

(1)お天王さまのお鳩取り

岩手県域の蘇民祭と同様に、なにがしかの争奪戦を伴う祭りは全国に見受けられます。その争奪の対象となるものは、神仏の御利益があるという呪具や護符、餅などが一般的なようです。

しかし、一関市川崎町薄衣に鎮座するお諏訪さま(浪分神社)の天王祭の場合は、他所に例をみない「もの」の争奪戦が毎年繰り広げられます。

その「もの」とは…「お鳩取り」という神事の名前が示すとおり、鳩(写真④)。神輿の天辺にすえられた鳩の木像です。

当地の天王祭は、初日の夕刻に神輿をお飯宮に遷し、2夜3日の祭事を実修、最終日夜に本殿へ還御する礼式を執り行います。お鳩取りは、その最終日に行わ

れる争奪戦で、かつては鳩が本殿内の神輿の上に奉御されるまで争われたといひます（現在はゴール地点を定めて勝者を決めている）。

ちなみに、お鳩取りの起源は定かではありませんが、最寄りの室根町に鎮座する室根神社においても「マツリバ行事」と呼ばれる大祭の中で神輿の天辺にすえた鳥（孔雀）の争奪戦を行っています。孔雀取りの場合は2基の神輿の先着争いに先立ち、それぞれの神輿の陸尺（かつぎ手）が孔雀を取り去り、いち早く仮宮に届け来訪を周知するための行為といひます。浪分神社のお鳩取りの成立過程には、この室根神社の孔雀取りの影響が少なからずあったのではないのでしょうか。



写真④ 一関市川崎町 天王祭にて
(2008.7.26撮影)
天王祭は健康を祈願し疫神疫病を祓う祭り。もとは浪分神社に合祀された彌栄神社(旧天王社)の祭典で6月13~15日(現在は7月中旬)に行われたという。

(2)お天王さまの回覧板

一般に、回覧板といえば町内会などの社会組織で情報を共有するための連絡ツールをいひます。

しかし、北上市相去のある地区の場合は、牛頭天王の御神体そのものが回覧板として地域を巡回しています（写真⑤）。

現在は約30軒の家々を廻っているというお天王さま。受け入れた家では棚の上などに立てかけて（かつては玄関のとこに留め置いて）拝みます。そして、



写真⑤ 北上市相去町 個人宅にて
(2008.08.04撮影)
板に「牛頭天王 金剛山」と線刻されており、その裏に明治25年(1892)の墨書銘等がある。かつては鳥海講中の人たちが拝んでいたが、時代の移り変わりとともに祭祀母体を代え今日に受け継いでいる。

特に願掛けがある家や願ひ事が成就した家などで衣替え（重ね着させていく）を行うのだそうです。

このような信仰の形が、いつ、何のために成立したのか、具体的な記録は残っていません。しかし、同じ北上市の口内地区では旧修験寺院に伝わる牛頭天王像を隣接集落で借り出し、それぞれの家で火防祭りを行っているといひ、相去の事例との共通した観念がうかがわれます。

(3)お天王さまとキュウリ



写真⑥ 北上市諏訪町 諏訪神社にて
(2008.7.14撮影)
境内社である八坂神社の宵宮。キュウリを手に参拝に訪れる人々に賑わう。

牛頭天王(またはスサノオノミコト)を祀る社堂の多くは、6月15日を祭日と定めています。そして、祭日にはお天王さまへ初物のキュウリを供える、それまではキュウリを食べてはならないとする禁忌が、岩手のみならず全国で報告されています。

こうした慣わしには、キュウリを輪切

りにしたときの切り口が八坂神社の神輿に似ているからなどと説明づける伝承が付随しているようです。

また、牛頭天王の祭日と同じ6月15日に擬似馬を飾る行事「馬っこつなぎ(写真⑦)」に天王信仰が結びついている地域もあります。



写真⑦ 山田町福士にて
(1998.6撮影)
田畠や屋敷神などにワラ馬を置きハットウを供える。

たとえば、奥州市江刺区藤里では、キュウリ畑を見回る天王さまのためにキュウリで馬を作ったといひます。また、遠野市上郷の場合は神々が天王さまのもとへワラ馬に乗って作物の相談に行くためといひ伝えていひます。このように、神仏が乗るための擬似馬を用意する慣わしは、全国各地でみられるものです。しかし、岩手県域のように天王信仰と結びついている例は非常に珍しいことのようにいひます。

ちなみに、宮城県北東部を中心に伝わる法印神楽(浜神楽)神楽本に収録されている演目「五矢」の詞章に、「六月二至テ青馬ヲ造リ、田畠二繫ハ、天王乗廻テ作物ノ衆毒ヲ祓」[本田安次 1975『陸前浜乃法印神楽』p.174]と、馬っこつなぎらしき行事を述べた内容が見られます。このことは、馬っこつなぎ行事の伝播に修験者が関与した可能性を感じさせます。

以上、県内各地の天王信仰を概観しましたが、まだまだ知られていない信仰の形が多いのではないかとおぼわれます。そこで、皆さまの身近なお天王さま情報を博物館までお寄せいただけると幸いです。よろしくお願ひいたします。

▼本文の作成にあたっては、多くの皆さまにご協力・ご教示を賜りました。この場をかりて、御礼申し上げます。